氏　名（本籍地）	前田　宏美（東京都）
学 位 の 種 類	博　士（文学）
学 位 記 番 号	甲第　87 号
学位授与年月日	2022 年 3 月 16 日
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第 5 条第 1 項該当
論　文　題　目	The Effect of Reading Instructions on Japanese Junior High School Students' English Reading Processes and Depth
論 文 審 査 委 員	（主査）　昭和女子大学　特任教授　金子　朝子
	（副査）　昭和女子大学　教授　小川　喜正
	昭和女子大学　教授　鈴木　博雄
	元常葉大学　特任教授　佐野　富士子

論 文 要 旨

2021 年に施行された新学習指導要領は、グローバル化や情報化する社会の中で、子供たちが将来に必要な英語の知識とコミュニケーション力を備えることができる学校教育の実現を目指している。英語が外国語である日本人にとって、最も多くの情報を英語で得る機会があるのは、話しことばからよりも書き言葉からで、中でも、書くことからよりも読むことからであると考えられ、英語の読解力を身につけて、その力を伸ばすことは非常に重要である。

これまでの日本における英語読解指導では、学習者がある英文を読んだ後に、そこに書かれている内容に関する教師からの質問が提示され、それらに正確に答えることができれば理解が十分にできたものと判断されてきた。しかし、新学習指導要領の「読むこと」では「概要を把握する」、「筆者の意図を読み取る」など、学習者が主体的に読解に取り組み、英文を包括的にとらえる方略を指導することが奨励されている。

そうした状況に対応して本論文は、日本人初級英語学習者である中学生を対象に指導者が与えるどのような読解教示が、学習者の読解プロセスと読解の深さに影響を与えるのかについて、調査・分析を行ったものである。研究課題を、読解教示は日本人中学生の英語読解プロセスと深さにどの程度の影響を与えるのか、また、読解教示が英文読解に与える影響はその種類によって異なるのか、に設定している。

1 回目の実験では 7 名の中学生を対象に、筆者の意図していることを読み取るという「タスク教示」と読解教示なしを、2 回目の実験では 62 名の中学生を対象に、筆者の考えと自分の考えを照らし合わせて批評するとともに自らの意見を述べるという「批評教示」と読解教示なしを、それぞれ比較して、生徒の読解のプロセスと読解の深さの違いを探った。両実験共、読解プロセスの測定には思考発話法を、読解の深さの測定には筆記再生法を用いて、記述された

アイディアユニットを分析し、それらの重要度別の使用頻度を測定することで調査を行った。その結果、教師による読解教示は中学生の読解プロセスに影響を与え、また、読解の深さに大きな影響を与えることが示された。

本研究は、初級英語学習者である中学生に、単に「この英文を読みなさい」という指示を与えるだけでなく、読む目的を明確に示す読解教示を与えることの重要性を示すと共に、読解教示を得た生徒たちは、何をどの程度理解すればよいかを考え、一貫性を構築しながら読解を進めることを明らかにした。上位レベルの読解プロセスを踏み、さらに幅広く深い読みを達成する学習者がいることも示され、読みの目的に応じて、教師が読解教示を使い分けることの効用も明らかにしている。

今後は、より長期的なデータの収集や、何らかの読解教示を与えても尚、読解プロセスやその深さに伸びが見えない生徒への指導法の開発なども期待されるところである。

論文審査結果の要旨

本論文は、日本人初級英語学習者である中学生を対象に、指導者の読解教示が、学習者の読解に何らかの影響を与えるのかどうかについて調査・分析を行なったものである。

読解教示は日本人中学生の英文読解プロセスと深さにどの程度の影響を与えるのか、また、読解教示が英文読解に与える影響は、その種類によって異なるのかを研究課題としている。1回目の実験では7名の中学生を対象に、筆者の意図していることを読み取るという教示をした場合と教示なしの場合を比較し、2 回目の実験では 62 名の中学生を対象に、筆者の考えと自分の考えを照らし合わせて批評して自らの意見を述べるという「批評教示」をした場合と読解教示なしの場合を比較している。その2つの実験結果を総合して、研究課題に答える手法によって結論を導き出したものである。同レベルの英語力を持つ生徒に対して2種類の読解教示と読解教示なしの指導を1度に行ってその結果を比較するという、より単純な研究手法を取ることができなかったのは、教育現場での実験であったためで、やむを得ない選択であったと言えよう。

両実験共、読解プロセスの測定には思考発話法を、読解の深さの測定には筆記再生法を用いた。思考発話法で得たデータを先行研究の手法に基づいて、さらにプロセスレベルとカテゴリーに分類するために多くの時間を費やし、詳細な分類を行っている。また、筆記再生法によって記述されたデータは、アイディアユニットに分類することで読解の深さを測定したが、データをどのアイディアユニットに分類するかについて、また、それらの重要度の判定についても、3 名の評価者間で一定以上の同意率を得るまでに、度重ねた議論を繰り返し、正確で適切な分類を行った点は高く評価される。また、それぞれの結果分析は、様々な統計を駆使して適切に行われている。そうした詳細な分析に基づいて、教師による読解教示は、中学生の読解プロセスに影響を与え、また、読解の深さにも大きな影響を与えることが示された。

本研究は、初級英語学習者である中学生に、単に「この英文を読みなさい」という指示を与えるだけでなく、読む目的を明確に示す読解教示を与えることの重要性を示した。そのような読解教示を受けた生徒たちは、何をどの程度理解すればよいかを考え、一貫性を構築しながら読解を進めることができることを本論文は明らかにした。上位レベルの読解プロセスを踏んで、さらに幅広く深い読みを達成する者がいることも示され、読みの目的に応じて、教師が読解教示を使い分けることの重要性も示唆しているものである。よって、審査委員会は全員一致で申請者は本論文による博士（文学）の学位授与に値すると判定した。

最後に、130 ページを超える本論文は英語で書かれており、日本の英語教育研究者や英語指導者ばかりでなく、世界の様々な地域で英語教育に携わる方々にも読んでいただけることが期待できることを付け加えたい。